

高校生における家族機能と学校適応感の関連について

—動的家族画を用いた検討—

奈須野玲加¹・石田 弓¹

The relationship between family function and adaptation feeling to high school students: examination by Kinetic Family Drawing

Reika Nasuno and Yumi Ishida

In this study, we examined the relationship between family function and adaptability to high school of high school students. In addition, we examined whether Kinetic Family Drawing (KFD) helps to screen high school students who experience problems in family function. We conducted a questionnaire survey and KFD for 172 high school students. The results of our examination showed a positive correlation between family function and the high school adaptability of high school students. Therefore, we conclude that high school students with better family function adapt better to high school. In addition, the results highlighted some helpful indicators of KFD that can help screen high school students who experience problems in family function. Through these indicators, we might be able to assess high school students who experience problems in family function unconsciously.

Key words: Family function, Adaptation feeling, high school students, Kinetic Family Drawing

問題

1. 家族機能

森岡・望月 (1991) によると、家族とは、「夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的包絡で結ばれた、第一次的な福祉追求の集団である」と定義されている。家族には、さまざまな機能があると考えられており、その分類は多岐にわたる。榎本 (2009) は家族機能を、衣食住の充足である生計維持機能、子どもの養育および社会化である養育機能、病人・けが人の世話、高齢者・障がい者の介護である保護・介護機能、情緒安定性や自己受容を促進し、意思の疎通を促進するような家族内コミュニケーション機能、家族システムの発達段階に合わせて家族関係のあり方を調整し、発達のおよび偶発的な家族の危機にうまく対処する社会的適応機

¹ 広島大学大学院教育学研究科

能の5つに分類している。また、三宅(2012)によると、家族機能の中でも特に家族内のコミュニケーションを促進し、情緒を安定させる機能は、臨床心理学的観点から重要な意味を持つとされている。家族が安らぎの場、憩いの場であることは自我が健全に発達していくための一つの条件であり、その機能が不十分であるような家族、すなわち機能不全家族は、自我発達と社会適応上の問題を招くとされてきた。また、家族を1つのシステムとして捉える家族システム論の考え方では、家族成員に問題が生じた場合、その家族成員のみに働きかけるのではなく、システム全体の問題として捉え、家族全体にはたらきかけることが重要であるとされている。

立山(2005)によると、家族機能を捉えるモデルに、円環モデル(Figure 1)がある。円環モデルでは、まず、凝集性が低い方から「遊離」、「分離」、「結合」、「膠着」の4段階に分けられ、中間のレベルである「分離」、「結合」では家族が最も機能的にはたらくが、両極のレベルである「遊離」、「膠着」では機能不全に陥り、家族の問題を呈しやすくなるとしている。また、適応性が低い方から「硬直」、「構造化」、「柔軟」、「無秩序」の4段階に分けられ、「構造化」、「柔軟」のレベルでは家族が機能的にはたらくが、「硬直」、「無秩序」のレベルでは家族の問題が呈しやすくなる。凝集性と適応性の関係を表したのが、円環モデルである。円環モデルによると、家族は16のタイプに分かれ、両次元とも中間レベルにあるバランス群、どちらかが中間レベルであり他方が極端なレベルの中間群、両次元ともが極端なレベルの極端群の3つのグループに分けられる。この円環モデルをもとに作成されたFamily Adaptability and Cohesion Evaluation Scales III (FACES III)の邦訳版20項目を立山(2005)が言語修正したものが家族機能測定尺度であり、凝集性因子、適応性因子の2因子から成っている。

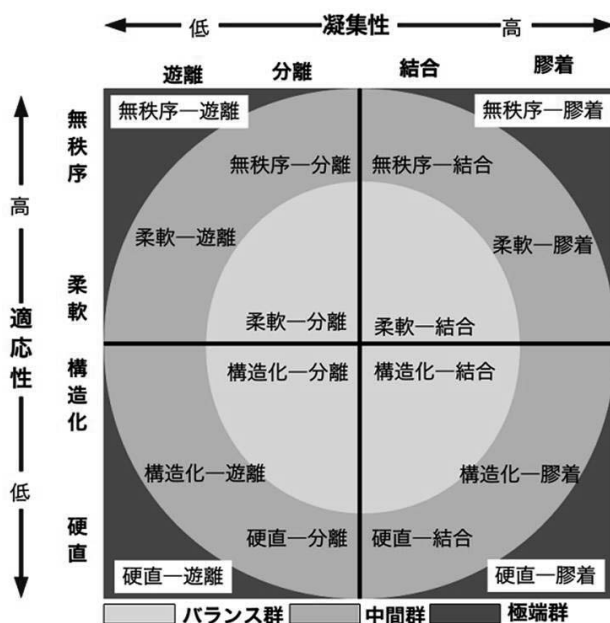


Figure 1. 円環モデル (立山, 2005)

2. 家族機能と学校適応感の関連

加藤・石川・田中・落合・高木・堀 (1981) によると、適応感とは「個人が自己を良い状態であると意識していることで、生活における安定感、充実感、生きがい感」であり、小・中・高校生の場合、学校生活に対する満足や成績に対する満足によって規定されることが多い。また、谷井・上地 (1994) は、学校適応感に関する変数として、学校の物理的側面、学校の社会的・文化的側面、学校の教育指導的側面、学校における友人関係、生徒本人の個人的側面、家庭環境要因を挙げている。なかでも家庭環境要因は、不登校の要因の1つとしても考えられ、家庭環境要因が学校適応感に与える影響は大きいと考えられる。

学校適応感を測る尺度に、石田 (2009) が作成した学校適応感尺度がある。この尺度において、学校適応感とは「学校生活や学校での活動に対する満足度や帰属意識などを要因とする児童生徒の主観的な心理状態」と定義されている。学校適応感尺度は、友人関係因子、学習関係因子、学校全体因子、教師関係因子の4因子から成る。友人関係因子では、友人に関する親密感、満足感などを測定する。学習関係因子では、学業に対する意欲関心、授業に対する満足感などを測定する。学校全体因子では、学校への帰属意識、満足感などを測定する。教師関係因子では、教師に対する信頼感、満足感などを測定する。石田 (2009) によると、学校適応感尺度は高い因子妥当性と信頼性を有している。

横山・久保田・古田 (2011) が中学生に行った研究では、家族機能と学校適応感の間に中程度の正の相関が見いだされた。三宅 (2012) が大学生に行った研究では、家族の不機能が青年の心の葛藤への影響を通して間接的に青年の適応に負の影響を及ぼすという結果を示している。これらのことから、家族機能と青年の適応感には関係があると考えられている。山岸 (2009) によると、青年期は、親からの独立・自立が主要な発達課題とされている。そのような青年に対して親は自立を望みつつも子離れの抵抗感を持つために、家族関係の問題が生じやすい。青年期における家族機能と学校適応感の関連を明らかにすることは、問題を生じさせる家族への介入の一助にもなると考えられる。

そこで本研究では、高校生の家族機能と学校適応感の関連を明らかにすることを目的として、質問紙法による調査を行った。質問紙法には、実施が容易である、集団に対して実施できる、採点が容易で客観的である、結果の解釈に経験をそれほど必要としない、広範囲の内容を扱えるといった利点がある。しかし、項目が具体的であることから、調査対象者が調査の目的に気づきやすい、回答を意図的に歪めることが可能である、言語能力に依存するといった問題点もある (岩永, 2009)。これらの問題点を補うものとして、投映法がある。本研究では、投映法の中でも特に家族関係のアセスメントに有用とされている「動的家族描画法」を用いることにした。

3. 動的家族描画法

動的家族描画法 (Kinetic Family Drawing : KFD) とは、Burns & Kaufman (1972 加藤・伊倉・久保訳 1998) が開発した描画法である。「何らかの行為・動作をしているところ」を描くように求めることで家族成員の描写が多様なものになると考えられている。つまり、KFDは被検者が日常、意識的にも無意識的にも彼自身の立場から自身を含んだ家族関係を捉え、その認知的構図の転写された

ものである(日比, 1986)。また, 石川(1984)は, 教示が非動的な家族画よりも動的なKFDの方が, テストとして多量の有益な情報を提示すると述べている。動的な家族成員を描くよう促すことで, 人物像の大きさとその順序や, 画面上での位置などについての多様性が生まれてくると考えられている。日比(1986)は, この多様性は家族成員を描くことに際して「自由」と, 一定用紙内に描くという「制約」の2つの矛盾を内包しているとしている。この「自由」と「制約」の下での家族成員の描写の多様性は, 描画者自身の主体的家族認知様式によって統制されたものとなり, 被検者の日常的な個別的家族認知パターンを投射したものになると考えられている。本研究ではKFDを用いることで, 調査対象者が日常的に体感している家族機能や無意識の水準の家族機能を見ることができると考えられる。

高橋(1984)によると, KFDの解釈の方法には, 全体的印象分析, 形式分析, 内容分析がある。全体的印象分析は, 描画の全体的印象から, 被検者の家族関係や家族関係への感情や欲求などを直感的に理解する方法である。大和田・阪(2007)は, 被虐待児のKFDにおける印象評定の際に, KFD印象評定尺度を作成し, 7件法での印象評定を行った。この尺度は, 安定・統合性因子, 活動・表出性因子, 親密性因子の3因子34項目からなり, 高い信頼性が確認されている。調査の結果, 一般児群は被虐待児群よりも評定値が有意に高いことが示された。

形式分析では, 描画がどのように描かれたかを分析する(高橋, 1984)。KFDでは形式分析の指標として, 描画の様式がある。これは「区分」, 「折り紙区分」, 「包囲」, 「辺縁位」, 「人物下線」, 「上部の線」, 「下部の線」によって評価される(日比, 1986)。

内容分析では, 家族画の中で強調されたり無視されている部分や特殊な対象を取り上げ, それらが象徴する意味を解釈して, 家族間の力動や葛藤やそれらに対する被検者の感じ方などについて情報を得ることができる。内容分析の指標には, 主題や家族のいる場所, 人物像の部分の協調や省略など様々なものがある(高橋, 1984)。

4. 本研究の目的

本研究では, 高校生の家族機能と学校適応感の関連を明らかにすることを第1の目的とし, 質問紙(家族機能測定尺度, 学校適応感尺度)による調査を行う。また, 質問紙法だけでなく, 投映法の1つであるKFDを用いる。KFDは, 被検者の日常的な個別的家族認知パターンを投射するものとされている。そこで, KFDが家族機能に問題を感じている高校生をスクリーニングするのに有用であるかを検討することを第2の目的とする。KFDの解釈には, 全体的印象分析, 形式分析, 内容分析を用いる。全体的印象分析では, 家族機能得点が高い生徒は低い生徒よりも全体的印象得点が高いかどうかを検討する。形式分析では, 家族機能得点が高い生徒は低い生徒よりも様式の出現率が高いかどうかを検討する。内容分析では, 家族機能得点の高低によって描画に表れる内容が違ってくるかどうかを検討する。

方法

調査対象者 広島県内の公立私立高校2校に通う生徒1~3年生177名を対象に調査を行った。その内, データに欠損のあった5名を除いた172名(男子71名, 女子100名, 不明1名)のデータを

分析対象とした。

調査期間 2015年7月と10月に調査を実施した。

使用する尺度 家族機能測定尺度と学校適応感尺度を用いた。家族機能測定尺度は、Olson et al (1985) が作成した FACESⅢの邦訳版 20 項目を立山 (2005) が言語修正したものであり、2 因子 20 項目から成る。「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」の 5 段階で回答を求めた。学校適応感尺度は、石田 (2009) によって作成され、4 因子 16 項目から成る。「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」の 5 段階で回答を求めた。

KFD 「あなたを含めて、あなたの家族全員について、何かしているところを描いてください。絵の上手下手は関係ありません。棒人間やマンガのような絵にせず、人物全体を描くようにしてください。描き終わったら、描いた人物が誰なのかがわかるように、人物のすぐ横に『自分』、『母親』、『父親』などと書き込んでください。絵を描き終わった後に、質問に回答していただきます。先生から指示のあった時間までに、絵を描いて質問に答えてください」という教示文を提示した。

手続き 調査はクラス単位で実施し、回答は無記名で行われた。実施には、高等学校の教員に生徒への実施方法の説明を依頼した。まず、A4 判画用紙、鉛筆、質問紙が入った封筒を生徒に配布した。1 ページ目の KFD の教示文を読ませ、KFD を描かせた。描画が描けた者から 2 ページ目に進み、絵に関する質問に回答させた。絵に関する質問は、描いた絵の説明と会話の内容の記述であった。描画と絵に関する質問にかかる時間は 20 分とし、20 分が経ったら合図をするよう教員に依頼した。その後、4 ページ目から家族機能測定尺度と学校適応感尺度に回答させた。最後に、フェイス項目として、性別、学年、家族構成を記入させた。調査時間は 40 分から 50 分であった。

倫理的配慮 依頼文書によって学校長の許可を事前に得た。また、実施するクラスの担当教員へ事前に調査の説明を行った。生徒には、本調査では、データは統計的に処理され個人の回答が公開されることはないこと、調査は成績評価とは関係がないことを調査用紙に記載した。協力の同意は回答をもって得ることとした。

結果

1. 尺度構成

(1) 家族機能測定尺度

家族機能測定尺度 20 項目について確認的因子分析を行った (Table 1)。十分な因子負荷量 (≥ 0.30 以上) を示さなかった 3 項目を削除した。適合度指標 $CFI=0.917$ 、I 因子 $\alpha=0.917$ 、II 因子 $\alpha=0.743$ より高い適合度を示したため、17 項目 2 因子を採用した。因子名は立山 (2005) を参考に、I 因子を凝集性因子、II 因子を適応性因子とした。

(2) 学校適応感尺度

学校適応感尺度 16 項目について確認的因子分析を行った (Table 2)。全ての項目において十分な因子負荷量を示した。適合度指標 $CFI=0.906$ 、I 因子 $\alpha=0.873$ 、II 因子 $\alpha=0.812$ 、III 因子 $\alpha=0.836$ 、IV 因子 $\alpha=0.792$ より高い適合度を示したため、16 項目 4 因子を採用した。因子名は石田 (2009) を参考に、I 因子を友人関係因子、II 因子を学習関係因子、III 因子を学校全体因子、IV 因子を教師関係因子と

した。

2. 家族機能測定尺度と学校適応感尺度の関連

(1) 尺度全体の相関

家族機能と学校適応感の関連を検討するために、家族機能測定尺度と学校適応感尺度の平均値の相関分析を行った。その結果、2つの尺度の間には、中程度の有意な正の相関が見られた ($r=.502$, $p<.01$)。

(2) 各因子間の相関

家族機能測定尺度の2因子と学校適応感尺度の4因子間の関連を検討するために、6因子の平均値の相関分析を行った。その結果、全ての因子間に弱から中程度の有意な正の相関があることが示された (凝集性因子 - 友人関係因子 : $r=.30$, $p<.01$; 凝集性因子 - 学習関係因子 : $r=.36$, $p<.01$; 凝集性因子 - 学校全体因子 : $r=.46$, $p<.01$; 凝集性因子 - 教師関係因子 : $r=.45$, $p<.01$; 適応性因子 - 友人関係因子 : $r=.30$, $p<.01$; 適応性因子 - 学習関係因子 : $r=.38$, $p<.01$; 適応性因子 - 学校全体因子 : $r=.44$, $p<.01$; 適応性因子 - 教師関係因子 : $r=.43$, $p<.01$)。

3. バランス群, 中間群, 極端群の比較

(1) 群分けの方法と各群の要約統計量

円環モデルに従って、家族機能測定尺度の凝集性因子と適応性因子をそれぞれ平均値±1標準偏差によって4つの次元に分け、調査対象者をバランス群, 中間群, 極端群に分類した。

(2) 3群の学校適応感尺度の違い

3群間の学校適応感の違いを検討するために、分散分析を行った。その結果、3群間に有意な結果は見られなかった ($F(2,169)=0.30$, $n.s.$)。

Table 1
家族機能測定尺度の因子分析

項目	I 凝集性因子	II 適応性因子	共通性	平均値	標準偏差
1. 私の家では、自由な時間を家族と一緒に過ごす	0.63		0.40	3.67	1.11
2. 私の家では、何かを決める時、家族の誰かに相談する	0.68		0.46	3.88	1.01
4. 私の家族は、みんなで一緒にやりたいことがすぐに思いつく	0.78		0.50	3.24	1.15
7. 私の家族は、みんなで一緒に何かをするのが好きである	0.76		0.61	3.49	1.07
10. 何かをする時は、家族みんなでやる	0.67		0.58	3.13	1.06
11. 私の家族はよくまとまっている	0.84		0.45	3.53	1.09
15. 私の家族は、お互いの友人を大切にしている	0.64		0.71	4.01	0.99
16. 家族の誰もが、お互いに強い結びつきを感じている	0.85		0.43	3.68	1.09
18. 他人同士よりも、家族同士の方が親しみを感じる	0.69		0.50	3.88	1.09
19. 私の家族では、困った時、お互いに助け合う	0.72		0.41	4.05	0.89
3. 私の家族は、子どもの意見も聞きつつ、しつけをしている		0.71	0.71	4.02	0.90
5. 家族内の決まりごとは、その時々に応じて変わる		0.31	0.13	3.56	0.94
9. 私の家では、必要に応じて家事を分担する		0.33	0.48	3.37	1.12
12. 家族の問題を解決する際には、子どもの意見も聞き入れられる		0.66	0.52	3.60	1.00
14. 私の家族は、いろいろな事についてよく話し合う		0.71	0.49	3.41	1.25
17. 家族のリーダーは、その時々々の状況に応じて変わる事がある		0.37	0.11	2.98	1.19
20. 私の家族では、何か問題が起きた時、その取り組み方を柔軟に変えられる		0.70	0.10	3.76	0.92
因子間相関	I	II			
	I	-	0.78**		
	II	-			

** $p<.01$ * $p<.05$

Table 2

項目	学校適応感尺度の因子分析				共通性	平均値	標準偏差
	I 友人関係因子	II 学習関係因子	III 学校全体因子	IV 教師関係因子			
1. この学校の友だちとは何でも話すことができると思う	0.83				0.69	3.94	1.01
3. この学校の友だちといっしょにいると楽しい	0.85				0.61	4.33	0.86
10. この学校の友だちとの関係に不満がある	0.68				0.72	3.95	1.01
15. この学校には、よい友だちがたくさんいると思う	0.84				0.88	4.09	0.97
2. この学校の授業を受けるのは楽しい		0.78			0.85	3.71	1.06
7. この学校の授業ではやる気がわいてくる		0.78			0.64	3.30	1.02
9. この学校の授業はつまらないと思う		0.55			0.61	3.52	0.91
16. この学校ではいっしょうけんめい授業をうけたいと思う		0.77			0.73	3.97	0.99
4. この学校の生徒であることがうれしい			0.94		0.30	3.72	1.09
5. この学校の生徒であることをほこりに思う			0.92		0.46	3.51	1.11
11. この学校を離れるとしたら、とてもつらいと思う			0.62		0.38	3.55	1.25
13. この学校の生徒であることを、強く意識している			0.52		0.22	3.32	0.99
6. この学校の先生には安心して何でも相談できると思う				0.80	0.27	3.40	1.09
8. この学校の先生に対して親しみを感じる				0.85	0.50	3.67	1.02
12. この学校の先生に対して不満がある				0.47	0.70	3.66	0.95
14. この学校では先生と気軽に話ができると思う				0.71	0.59	3.69	0.92
	因子間相関						
	I	—	0.50**	0.63**	0.47**		
	II		—	0.58**	0.67**		
	III			—	0.57**		
	IV				—		

** $p < .01$ * $p < .05$

4. 描画の分析

描画の分析には、全体的印象分析、形式分析、内容分析を用いた。

(1) 全体的印象分析

筆者と心理学専攻の大学院生3名がKFD印象評定尺度によってKFDを評定し、評定者ごとの α 係数を求めた。その結果、 $\alpha = .948, .935, .961, .961$ であり、高い信頼性が得られた。そこで、4名の評定値の平均点を評定値として採用した。採用したKFD印象評定尺度の評定値34項目に確認的因子分析を行った (Table 3)。十分な因子負荷量 ($|.30|$ 以上) を示さなかった3項目を削除した。適合度指標 CFI=.733, I 因子 $\alpha=.924$, II 因子 $\alpha=.949$, III 因子 $\alpha=.967$ より高い適合度を示したため、31項目3因子を採用した。因子名は大和田・阪 (2007) を参考に、I 因子を安定・結合因子、II 因子を活動・表出性因子・III 因子を親密性因子とした。

Table 3

KFD印象評定尺度の因子分析

項目番号	I 安定・結合因子	II 活動・表出性因子	III 親密性因子	共通性	平均値	標準偏差
8. まとまったーばらばらな	0.73			0.53	4.52	1.16
19. わかりにくいーわかりやすい	0.88			0.77	4.90	1.02
20. 調和したー不調和な	0.83			0.68	4.57	1.06
23. 現実的なー空想的な	0.60			0.36	5.37	0.70
27. バランスの悪いーバランスのよい	0.80			0.64	4.34	0.91
28. 抽象的なー具体的な	0.77			0.59	5.16	0.82
30. 不完全なー完全な	0.83			0.70	4.13	0.70
31. 安定感のないー安定感のある	0.87			0.75	4.53	0.82
32. 丁寧なー粗雑な	0.60			0.36	4.17	0.90
3. 動的なー静的な		0.76		0.58	4.03	1.22
4. にぎやかなーさびしい		0.90		0.82	4.71	1.20
7. ストーリーのあるーストーリーのない		0.82		0.67	4.31	1.16
9. 生き生きしたー生氣のない		0.96		0.92	4.66	1.07
18. 豊かなー貧弱な		0.86		0.73	4.34	0.92
21. 情感のこもってないー情感のこもった		0.91		0.83	4.30	1.19
22. 弱いー強い		0.65		0.43	3.96	0.64
24. つまらないー面白い		0.91		0.82	4.07	0.83
25. 小さいー大きい		0.45		0.20	3.95	1.15
29. 表情のないー表情のある		0.84		0.71	4.31	1.43
34. 閉鎖的なー開放的な		0.81		0.65	4.21	0.94
1. 穏やかなー激しい			0.67	0.45	5.20	0.80
2. 空虚なー充実した			0.90	0.81	4.69	1.08
5. 和やかなー和やかでない			0.88	0.77	5.25	1.19
6. 親密なー親密でない			0.89	0.80	4.89	1.16
10. のびのびしたー窮屈な			0.81	0.65	4.67	0.99
12. 明るいー暗い			0.94	0.89	4.85	1.07
13. 楽しいー苦しい			0.91	0.82	4.97	1.02
14. 冷たいーあたたかい			0.94	0.89	4.96	1.01
15. 緊張したーくつろいだ			0.63	0.40	5.04	0.90
26. 親しみやすいー親しみにくい			0.92	0.85	4.49	1.16
33. 不気味なー不気味でない			0.85	0.72	5.07	1.19
因子間相関						
I	—	0.82**	0.80**			
II		—	0.84**			
III			—			

** $p < .01$ * $p < .05$

その後、円環モデルによって分けた3群間の各因子得点の違いを検討するために、分散分析を行った。その結果、どの因子の群間にも有意な差は見られなかった(安定・結合性因子: $F(2,169)=1.713$, $n.s.$; 活動・表出性因子: $F(2,169)=1.188$, $n.s.$; 親密性因子: $F(2,169)=1.335$, $n.s.$)。

次に、KFD印象評定尺度の値によって群分けを行った。各因子を高低の2群に分け、因子間の高低の組み合わせによって8群に分けた。8群の要約統計量と家族機能測定尺度の平均値・標準偏差をTable 4に示した。家族機能得点は1群が最も高く、6群が最も低かった。

(2)形式分析

まず筆者らで、調査対象者全員の描画の様式の有無を検討した。その後、円環モデル3群における各様式の出現率を計算した。出現率は、各群で各様式を表現した調査対象者の数を各群の参加者の数で割って算出した(Table 5)。また、「区分」、「包囲」、「下部の線」の様式の例をFigure2~4に示

した。

そして、3群間の各様式の出現数の違いを検討するために、 χ^2 検定を行った。その結果、「区分」は、極端群で有意に多かった ($\chi^2=6.401, p<.05$)。「包囲」は、バランス群で有意に少なく、極端群で有意に多かった ($\chi^2=6.603, p<.05$)。「下部の線」は、バランス群で有意に多かった ($\chi^2=4.598, p<.05$)。「辺縁位」、「人物下線」、「上部の線」では、3群間の出現数に有意な差は見られなかった (「辺縁位」: $\chi^2=3.881, n.s.$; 「人物下線」: $\chi^2=1.116, n.s.$; 「上部の線」: $\chi^2=3.420, n.s.$)。

Table 4
KFD印象評定尺度各因子別分類の要約統計量と家族機能測定尺度の平均値・標準偏差

因子/群		1	2	3	4	5	6	7	8
I 安定・結合因子	平均値	5.28	4.90	4.86	4.33	4.87	4.31	4.32	3.86
	標準偏差	0.37	0.16	0.15	0.31	0.19	0.14	0.26	0.45
II 活動・表出性因子	平均値	5.05	4.07	4.82	4.56	3.67	4.58	3.98	3.27
	標準偏差	0.47	0.23	0.06	0.29	0.35	0.29	0.17	0.49
III 親密性因子	平均値	5.75	5.07	4.03	5.37	4.53	4.30	5.03	3.93
	標準偏差	0.38	0.11	0.83	0.34	0.27	0.57	0.09	0.56
家族機能測定尺度	平均値	3.83	3.35	3.54	3.71	3.65	3.24	3.70	3.36
	標準偏差	0.62	0.63	0.98	0.60	0.50	0.69	0.34	0.80

Table 5
円環モデル3群における各様式の出現数 (出現率)

様式	バランス群 (N=96)	中間群 (N=45)	極端群 (N=31)	合計 (N=172)
区分	11 (11.4)	5 (11.1)	9 (29.0)	25 (14.5)
折り紙	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
包囲	16 (16.7)	11 (24.4)	12 (38.7)	39 (22.7)
辺縁位	9 (9.4)	5 (11.1)	7 (22.6)	21 (12.2)
人物下線	6 (6.3)	1 (2.2)	2 (6.5)	9 (5.2)
上部の線	2 (2.1)	0 (0.0)	2 (6.5)	4 (2.3)
下部の線	8 (8.3)	0 (0.0)	1 (3.2)	9 (5.2)



Figure 2. 「区分」の例

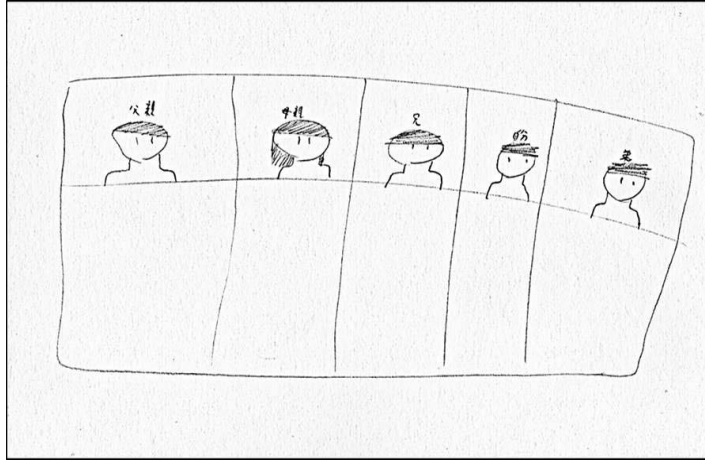


Figure 3. 「包囲」の例

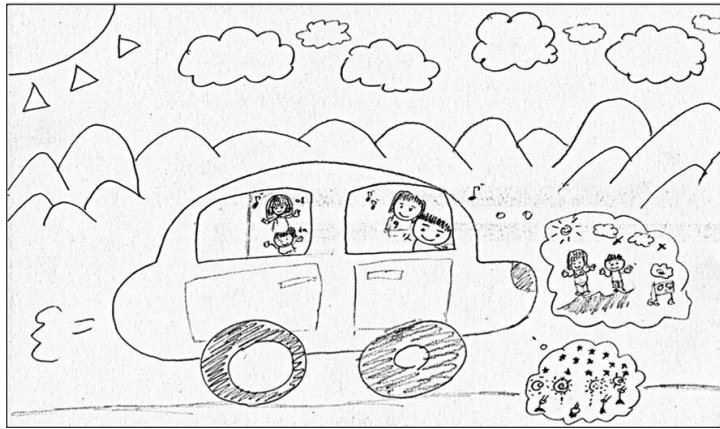


Figure 4. 「下部の線」の例

(3)内容分析

内容分析の指標として、描画に描かれた家族の行動の内容を用いた。分類は筆者と心理学専攻の大学院生1名と臨床心理学を専門とする教員1名で行った。分類の仕方を Figure 5 に示した。まず、家族画を家族全員が同じ行動をしているか別行動を行っている者がいるかで分けた。1人でも別行動を行っていれば、「別行動」のカテゴリに分類した。その後、「同行動」、「別行動」それぞれのカテゴリの中で、「活動メイン」か「会話メイン」という基準で分類した。「活動メイン」とは、例えば家族で野球をしていたり、会話がなくて食事をしているものである。「会話メイン」とは、例えば食事とは関係のない会話をしながら食事をしているものである。なお、食事中に会話をしているも内容が食事自体に関するものであれば「活動メイン」のカテゴリに分類した。次に、「活動メイン」の描画を「交流あり」と「交流なし」に分けた。交流は、家族全体で見られるものとした。また「別行動」のカテゴリでは、別行動を行っている者たちの交流の有無を検討した。最後に、「交流あり」のカテゴリに関しては、交流が「協力的」であるか「衝突的」であるかに分類した。「協力的」とは、

家族間の交流が衝突なく行われているものとした。「衝突的」とは、家族間の交流に対立や叱責などが含まれているものとした。円環モデル3群における全カテゴリの出現率 (%) を Table 6 に示した。

また、円環モデル3群における各カテゴリの出現数 (出現率) を Table 7 に示した。円環モデル3群間における各カテゴリの出現数の違いを検討するために、 χ^2 検定を行った。同/別行動カテゴリでは、極端群の「同行動」が有意に少なく、「別行動」が有意に多かった ($\chi^2=6.810, p<.05$)。活動/会話カテゴリ、交流有無カテゴリ、協力/衝突カテゴリでは、有意な差は見られなかった (活動/会話カテゴリ: $\chi^2=1.937, n.s.$; 交流有無カテゴリ: $\chi^2=0.214, n.s.$; 協力/衝突カテゴリ: $\chi^2=0.185, n.s.$)。

また、各カテゴリにおいて、家族機能測定尺度得点の平均値間の t 検定を行った。その結果、どのカテゴリにおいても有意差は見られなかった (同/別カテゴリ: $t=3.30, n.s.$; 活動/会話カテゴリ: $t=-2.14, n.s.$; 交流有無カテゴリ: $t=4.41, n.s.$; 協力/衝突カテゴリ: $t=-0.59, n.s.$)。

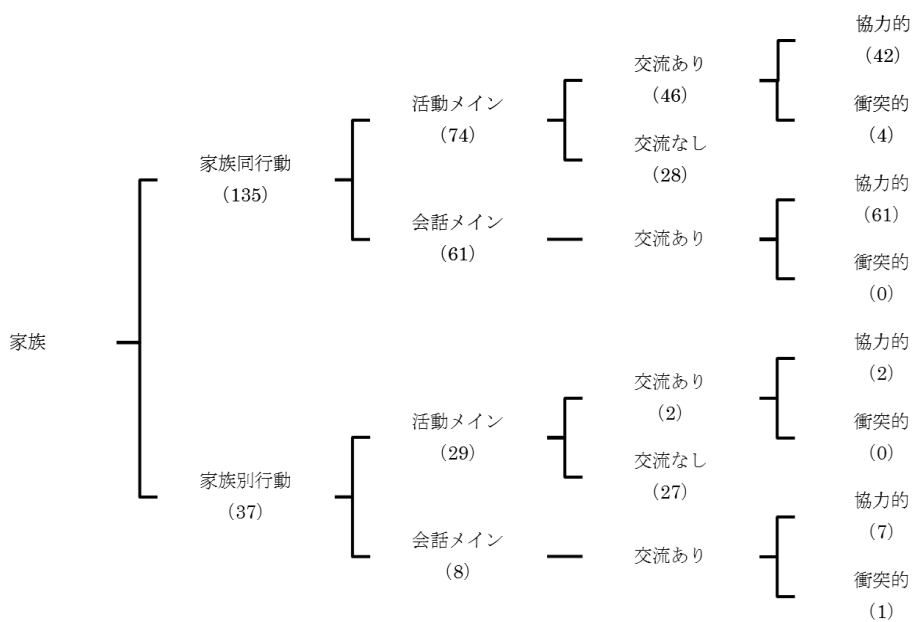


Figure 5. KFD の内容分類のカテゴリ (出現数)

Table 6
円環モデル3群における全カテゴリの出現率 (%)

				バランス群 (N=96)	中間群 (N=45)	極端群 (N=31)	合計 (N=172)
同行動	活動メイン	交流あり	協力的	21.9	24.4	32.3	24.4
			衝突的	2.0	2.2	3.2	2.3
		交流なし	18.8	20.0	3.2	16.2	
会話メイン	交流あり	協力的	38.5	37.8	22.6	35.4	
		衝突的	0.0	0.0	0.0	0.0	
別行動	活動メイン	交流あり	協力的	2.0	0.0	0.0	1.2
			衝突的	0.0	0.0	0.0	0.0
	会話メイン	交流あり	協力的	3.1	4.4	6.5	4.1
			衝突的	1.0	0.0	0.0	0.6
		交流なし	12.5	11.1	32.3	15.7	

Table 7
円環モデル3群における各カテゴリの出現数 (出現率)

基準		バランス群 (N=96)	中間群 (N=45)	極端群 (N=31)	合計 (N=172)
同or別	同行動	78 (81.2)	38 (84.4)	19 (61.3)	135 (78.5)
	別行動	18 (18.8)	7 (15.6)	12 (38.7)	37 (21.5)
活動or会話	活動メイン	55 (57.3)	26 (57.8)	22 (71.0)	103 (59.9)
	会話メイン	41 (42.7)	19 (42.2)	9 (29.0)	69 (40.1)
交流有無	交流あり	66 (68.8)	31 (68.9)	20 (64.5)	117 (68.0)
	交流なし	30 (31.2)	14 (31.1)	11 (35.5)	55 (32.0)
協力or衝突	協力的	64 (66.7)	30 (66.7)	19 (61.3)	113 (65.7)
	衝突的	2 (2.0)	1 (2.2)	1 (3.2)	4 (2.3)

考察

1. 家族機能と学校適応感の関連

家族機能と学校適応感の関連を検討するために相関分析を行った結果、中程度の有意な正の相関が見られた。よって、家族関係の良さと学校適応感の良さは関連があることが明らかとなった。また、学校適応感尺度の学校全体因子と教師関係因子は、他の2つの因子よりも家族機能測定尺度の両因子と強い正の相関を持つことが示された。石田 (2009) によると、学校全体因子は、「この学校の生徒であることをほこりに思う」、「この学校の生徒であることを、強く意識している」などの項目から成り、学校への帰属意識や満足感に関する因子である。一方、家族機能測定尺度は、「私の家では、何かを決める時、家族の誰かに相談する」、「私の家族は、いろいろな事についてよく話し合う」などの項目から成っている。生徒が学校生活を適応的に送る上で日々の家族の協力は不可欠であり、進路の相談や自己決定に関して親が相談に乗るなどの日常的な支えが学校への満足感や帰属意識を高めていくと考えられる。また、教師関係因子は、「この学校の先生には安心して何でも相談できると思う」、「この学校の先生に対して親しみを感じる」などの項目から成り、教師に対する信頼感や満足感に関する因子である (石田, 2009)。思春期・青年期において、家庭における大人である親との関わりと学校場面での大人である教師との関わりには関連があると考えられる。

2. バランス群, 中間群, 極端群の比較

円環モデルに従い, 家族機能得点によって調査対象者を3群に分類し, 学校適応感得点を分散分析を用いて比較したが, 有意な差は認められなかった。全体の散布図を確認したところ, 右上に偏った散布図であった。本研究の調査対象者は一般の高校生であり, 学校生活を維持することが出来る程度の学校適応感を持っていたため, 差が認められなかったと考えられる。

3. 全体的印象分析

KFDの全体的印象が生徒が感じている家族機能の問題の有無をアセスメントするのに有用であるかを検討するために, 円環モデル3群間におけるKFDの全体的印象得点を比較した。その結果, 3群間に有意な差は見られなかった。そこで, KFD印象評定尺度各因子得点の高低の組み合わせによって調査対象者を8群に分けたところ, 最も家族機能得点が高い群は全ての因子得点が高い1群であった。一方, 最も得点が高い群は活動・表出性因子のみが高い6群であった。サンプルが少ないため統計的処理は行わなかったが, 1群と6群の得点に大きな差は見られなかった。そこで家族機能得点とKFD印象評定尺度得点の散布図を確認したところ, 家族機能得点が高くて, KFD印象評定得点が低い値を示した調査対象者が約2割いることが明らかとなった。そのため, 質問紙には示されない, 生徒が無意識的に感じている家族機能がKFDに示される可能性があると考えられる。

4. 形式分析

KFDに示される様式の有無が生徒が感じている家族機能の問題の有無をアセスメントするのに有用であるかを検討するために, 各KFDの様式の有無の検討を行った。その結果, 全体で最も出現率の高い様式は, 「包囲」(22.7%)であった。家族機能の問題を反映している可能性があり, 好ましくない意味を表す様式の全体的な出現率が少ないことから, 様式が描かれることは標準的でない反応であると考えられる。それにもかかわらず様式を示す一部の生徒がおり, 家族機能に問題があることを示すサインとして, 様式を示している可能性がある。

各様式における3群間の出現数の違いを検討するために χ^2 検定を行った結果, 「区分」は極端群で有意に多かった。「包囲」はバランス群で有意に少なく, 極端群で有意に多かった。動的家族画において, 「区分」とは素直な愛情表現が許されない時に当該人物や家族全員を線や四角形によってそれぞれ区別し, 孤立化した様式を示している。「包囲」は社会的に孤立した児童や引っ込み思案の児童の描画に多く見られ, 家族の感情的隔離を意味すると同時に, 自他の極端な人格障害からの逃避を意味する場合がある。また「包囲」とは, 他者に対してあるいは他者との関係における自分自身に開放的な感情的態度を持ち得ない時, 他者あるいは自分自身を閉じ込めてしまう様式を示している(日比, 1986)。家族機能得点が高い群である極端群において「区分」と「包囲」が有意に多く, この2つの様式は家族機能の問題をアセスメントするための指標として有用であることが示唆される。

また「下部の線」は, バランス群における出現数が有意に多かった。「下部の線」は崩壊しかけている家庭や強いストレス下にある児童が, 不安感を解消するための強く堅い土台として描くと考えられている(日比, 1986)。バランス群は, 家族機能が良好な群であるが, この群において「下部の線」が多かったことは, 質問紙には示されない, 生徒が無意識的に感じている家族機能の問題が「下

部の線」という形で現れたと考えられる。

質問紙によって測定できるのは生徒が意識的に感じる家族機能のみであり、KFDでは生徒が無意識的に感じている家族機能を見ることができるとされている。よって、「区分」、「包囲」、「下部の線」は、無意識的に家族機能の問題を感じている生徒をアセスメントするための指標となりうることが示唆された。

5. 内容分析

KFDに描かれる家族の行動の内容が、家族機能の問題を無意識的に感じている生徒をアセスメントするのに有用であるかを検討するため、円環モデル3群間における各基準の出現数の違いを χ^2 検定を用いて比較した。その結果、同／別行動基準において極端群の「別行動」が有意に多かった。家族が別の行動をしているKFDを描く生徒は、家族機能に問題を感じている可能性が示唆されたことから、KFDに描かれた家族の行動が同じであるかどうかという視点は、無意識的に家族機能の問題を感じている生徒をアセスメントすることができると考えられる。

総合考察

1. 本研究の成果

本研究の目的は、高校生の家族機能と学校適応感の関連を明らかにした上で、KFDが家族機能に問題を感じている高校生をスクリーニングするのに有用であるかを検討することであった。

まず、家族機能が適応的に機能している生徒では学校適応感も良いことが明らかとなった。つまり、学校に良い適応感を持っている生徒の家族機能は良好であると考えられる。

次に、KFDが家族機能に問題を感じている生徒をアセスメントするのに有用であると考えられる指標がいくつか明らかになった。特に、形式分析では、「区分」、「包囲」、「下部の線」は無意識的に家族機能の問題を感じている生徒をアセスメントするための指標と成り得ることが示唆された。また、内容分析では、描画中の家族が同行動か別行動という視点が、生徒の感じている家族機能をアセスメントする指標として役立つ可能性がある。これらの指標を用いて、無意識的に家族機能の問題を感じている生徒を抽出することで、問題を抱える家族への早期の介入に繋がると考えられる。

2. 今後の展望

本研究では、高校生が無意識的に感じる家族機能を把握するために、KFDのみを用いた。KFDに描かれる描画の内容は多岐に渡り、回想的な側面もあるため、現在ではなく過去の家族の様子が描写されたものもある。そのため今後の展望として、現在の家族の関係性を把握することができる家族イメージ法 (FIT) などをテストバッテリーとして用いることで、多面的に家族を把握できるようにしたい。

引用文献

Burns, R. C. & Kaufman, S. H. (1972). *Actions, styles and symbols in kinetic family drawings (K-F-D): An interpretative manual*. Brunner/Mazel.

(バアンズ, R. C. カフマン, S. H. 加藤孝正・伊倉日出一・久保義和 (訳) (1998). 子どもの家族

画診断 黎明書房)

- 榎本博明 (2009). 家族の機能と家族内コミュニケーション 榎本博明 (編著) 家族心理学 おうふう pp.16-37.
- 日比裕泰 (1986). 動的家族描画法 ナカニシヤ出版
- 石田靖彦 (2009). 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, **12**, 287-292.
- 石川 元 (1984). 家族研究における 2 つの流れ—家族画テストと家族絵画療法 (その 1) — 精神医学, **26** (5), 452-463.
- 岩永 誠 (2009). 心理検査法の基礎 宮谷真人・坂田省吾・林 光緒・坂田桐子・入戸野宏・森田愛子 心理学基礎実習マニュアル 北大路書房 pp.81-89.
- 加藤隆勝・石川透・田中祐次・落合良行・高木秀明・堀啓造 (1981). 現代青少年の人間関係と適応感 (1) —研究の目的・方法— 日本教育心理学会第 23 回総会発表論文集, 566-567.
- 三宅義和 (2012). 家族機能が青年期危機に及ぼす影響について 神戸国際大学紀要, **83**, 1-7.
- 森岡清美・望月嵩共 (1992). 新しい家族社会学 培風館
- 大和田攝子・阪 永子 (2007). 動的家族画における被虐待児の描画特徴—印象評定を用いた分析— 神戸松蔭女子学院大学研究紀要, **48**, 1-15.
- 高橋雅春 (1984). 心理診断法としての描画テスト—家族画テストを中心として— 関西大学『社会学部紀要』, **16**, 277-288.
- 谷井淳一・上地安昭 (1994). 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, **42**, 185-192.
- 立山慶一 (2006). 家族機能測定尺度 (FACESⅢ) 邦訳版の信頼性・妥当性に関する一研究 創価大学大学院紀要, **28**, 285-306.
- 山岸明子 (2009). 親子関係の発達 榎本博明 (編著) 家族心理学 おうふう pp.114-124.
- 横山理沙・久保田端・古田真司 (2011). 中学生における感動体験と自己肯定感の関連についての検討—学校適応と家族機能の影響に着目して— 東海学校保健研究, **35**, 17-24.